

関西大学人権問題研究室

第46回 公開講座

在日コリアンの解体

日時 2006年6月23日(金) 13:00～14:30

場所 千里山キャンパス 尚文館(大学院) 1階 マルチメディアAV大教室

人権問題研究室特別研究員

講師 梁 永 厚 (やん・よんふ)

* * *

「在日コリアン」(略「在日」)という呼び方は、一般的に日本在住の韓国・朝鮮人の個人またはその全体といった意味合いで使われている。しかし歴史的には、植民地期(1910～45)の朝鮮半島にエスニックなルーツを持つ人達、いわゆるオールドカマーおよびその子孫のうち、日本国籍を取得せず韓国籍か朝鮮籍を保持し、「特別永住者」という在留資格を得て住んでいる約47万人の人達と、近年に結婚とか就労の在留資格を得て日本に来た、17万人のニューカマーのことである。

ところでオールドカマーを原初とする「在日」は、いま1世(百分比約10%)から、日本生まれの2世～5世にわたる世代構成である。そして、かれらのこれまでを顧みると、1世が主役であった時代は強固な民族性とルサンチマン的な思想を結んだ「在日」を貫こうとしていた。しかし主役世代が交代するにつれて、1世的「在日」の解体が進み、かわって望ましい未来を構想し、その実現のために努力していくあり方へと徐々に転換されている。端的に括ると解体と創造ということになる。

それを小説のなかでみると、「在日」作家・梁石日の『血と骨』の父親像は当時の現実そのものであったが、いまの世代には幻想か神話としてしか思えないようである。けれども金城一紀の『GO』の主人公は、「在日」であることを自己肯定し自らの青春に挑戦している生き様が描かれている。金城一紀は朝鮮学校(小学校?)出身であるが、朝鮮学校にこめられた1世の希求にはまらず、朝鮮学校体験から朝鮮学校性を独創し、日本の同世代と交わろうとしているように思える。

さて、この公開講座では1世的な「在日」がほぼ解体している現状。朝鮮学校の歴史と現状および主張されている「民族教育権」は客観性を欠いていること。さらに民族という特殊性を普遍性にすりかえて、「在日」の未来を構想している既存団体のありようについて、いわば何世代まで「在日」でいこうとしているのか!などについてお話したいと考えている。

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。

第47回	10月27日(金)	軽度発達障害を伴う子どもの理解と対応	研究員・文学部専任講師	加戸 陽子
第48回	11月24日(金)	「女人禁制」からジェンダーを問う	委嘱研究員	源 淳子
第47・48回会場は右のとおり		時間：13時～14時30分	場所：総合図書館ホール	

主催

関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 Tel 06-6368-1182

阪急千里線「関大前」駅下車

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>